

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第13回「種雄牛系統の分類」（後編）

奥井廉種畜場長らが分類した種雄牛父系の内でも、中土井系と熊波系が現在まで続いています。

この2父系が今につながる過程を振り返ってみます。

前号に書いたように、美方郡産牛組合はブラウンブームの終焉が見えると、速やかに但馬牛による改良に舵を切り、但馬牛血統登録組合を立ち上げ、町村の種雄牛事業を組合事業としましたが、これによって但馬牛の改良が本格的に動き出しました。

（尚、前回の記事中で種雄牛事業が町村事業より郡単位の事業へ拡大したのは1927年としていましたが、正しくは1923年でした。訂正します。）

1925年、美方郡畜産組合（1915年、産牛組合を改称）は郡内の登録牛から基礎雌牛100頭を選抜して基礎種雄牛を交配し次代の種雄牛を造るという、現在と同じような仕組みを作って、種雄牛造成を始めました。

種雄牛の更新には当歳育成、2歳育成、2歳補充、3歳補充の4パターンがあり、当歳育成と2歳育成が基礎雌牛から生まれた牛だったと言います。

基礎雌牛から生まれた種雄牛の特定は難しいですが、田尻の曾祖父鹿島や茂光の曾祖父第二秋岡は、この仕組みで造った種雄牛と同じ年の生まれです。

当時の美方郡は、現在の新温泉町が温泉町、照来村、八田村、大庭村、浜坂町、西浜村に、香住区を除く香美町は小代村、村岡町、兎塚村、射添村に分かれ、現養父市の熊次村も含まれていました。そして現新温泉町の6町村を“西部”、それ以外を“東部”と言いました。

組合は雌牛頭数に応じて各町村に1～4頭の種雄牛を配置し、これとは別に温泉種牛舎に西部、村岡種牛舎に東部で使う基礎種雄牛を2頭ずつ配置しました。

表 父系創生期に美方郡で供用された種雄牛の父系別、出生地別頭数

出生期	父系	出生地							計
		照来村	八田村	温泉町	浜坂区	小代村	村岡区	不明	
大正期	中土井	14				3	1		18
	熊波	2					1		3
	長栄					6			6
	第二中島	1				1			2
	満重		1						1
	熱田					9			9
	中井	8							8
	その他	9	8	2	2	9	11	2	43
	計	34	9	2	2	28	13	2	90
昭和初期 (～S10)	中土井	27	15	6	2	10	6	6	72
	熊波					8		1	9
	長栄	3				18	5		26
	第二中島	21	1		2	2	1	4	31
	満重	16	16	2		1	1	10	46
	熱田					2			2
	中井								0
	その他	2	2					1	5
	計	69	34	8	4	41	13	22	191

注1) 浜坂区は大庭村、西浜村、村岡区は村岡町、射添村、兎塚村

注2) 色付きは父系発祥地

大正期の種雄牛は、照来と小代生まれの種雄牛が突出して多くいます。両村は改良先進地で、組合は照来、小代生まれの牛を軸に各町村に種雄牛を配置しました。

また、基礎種雄牛は、照来と小代生まれの牛をペアで配置し、西部と東部の遺伝子交流を進めたようです。

この結果、照来と小代に配置された種雄牛は、大正期には地元の父系の牛が殆どでしたが、昭和になると

他村でできた父系の種雄牛が増えました。こうなると系統間交配が進みます。

中土井系は照来生まれの中土井から発し、5代目の岩倉まで同村生まれの牛で引き継がれてきました。しかし、6代目の第十四茅野は小代の前垣母系の子で、母方曾祖父に第二熱田を持ち、小代の血統を交えました。さらに7代目の田尻の母ふく江も小代の家系で、祖母久は熱田の孫にあたります。

この様に田尻は第二熱田と熱田を引き継ぐ牛として、あつた蔓の基礎種雄牛となりました。そして、あつた蔓の基礎雌牛との間に田福土井や菊美土井が生まれ、照来でできた中土井系ですが、小代の父系のようになっていました。

一方、熊波系は長栄系、第二中島系、満重系が衰退後に登場したマイナーな父系でした。そんなこともあってか、初めから系統間交配の家系でした。

射添生まれの熊波は、照来のビッグマザー花との間に2代目第三塩山を設けます。その第三塩山は小代で使われ、熱田の孫宮伝との間に3代目第二秋岡を造り、第二秋岡と熱田の娘吉淵との交配で4代目第三久須部が生まれます。

そんな経緯で5代目三福の息子福波があつた蔓創生期の基礎種雄牛に名を連ねたのかもしれませんが。

6代目茂光の母利さかゑは照来の家系で、第二中島系の第十三飯野の娘です。

7代目茂福の母系は八田に起源しますが、祖母が照来に来て、茂福は照来で生まれました。

そして、ふき蔓の基礎種雄牛になり、基礎雌牛たつみとの間に茂金波が生まれ、熊波系は照来の父系のようになります。

茂福も茂金波も母方祖先に田尻がいて、熊波系も田尻を引き継ぎました。

更に、城一系とよし蔓による系統繁殖に努めてきた城崎郡も、よし蔓の基礎雌牛あさに田尻を交配して奥土井系を造り、ここから城一系や勘右衛門系にも田尻の遺伝子が広がり、田尻を祖先に持たない但馬牛はいなくなりました。

ところで田尻は、自然交配主体でしたが、雄 762 頭、雌 701 頭と多くの産子を残し、雄子牛の 178 頭が種雄牛になったといえます。

それに加え、皆田尻の子孫となった但馬牛が全国で種雄牛や繁殖雌牛として使われ、黒毛和種の 99.9%が田尻を受け継ぐといわれます。

但馬牛の能力を高め、形質を安定させ、血統を固定しようとした取り組みだったのですが、但馬牛、更には黒毛和種の遺伝的単一化の大きな一歩となってしまいました。